

「やらせ」と「さくら」

泊原発は、北電の「やらせ問題」で揺れています。

北電の「やらせ問題」は、泊3号機のプルサーマル計画で、道と地元4町村が2008年10月に開催したシンポジウムをめぐり、北電が社員に参加と推進意見の表明を求める「やらせ」を指示する文書をメールで送っていた疑いがあるとするものです。

今回の「やらせ問題」は今開催中の道議会でも大きく取り上げられており、議論の推移によっては、泊原発3号機のプルサーマル計画そのものに大きな影響を与えることになるでしょう。

そもそも、北電は、何故「やらせ」をしようとしたのでしょうか。ここからは、私の勝手な想像ですが、シンポジウムを道民に対する合意形成のアリバイに利用しようとしたからではないか、と考えています。原発についてシンポジウムを開催すれば、反対派が動員をかけてくることは想像に難くありません。この為、北電としても、原発に賛成の道民がいることを示したかったのではないのでしょうか。

シンポジウムとか説明会を開催する際、主催者は、会を盛り上げるために一般参加者から質問や意見を出してもらう「さくら」を用意する場合があります。これも「やらせ」といえば「やらせ」なのですが、会の趣旨を活かす範囲で行われているのであれば、目くじらを立てるほどのことではありません。

ただ、2008年に行われたシンポジウムは、原発についての道民の理解を深める大事な場であったはずですから、北電は反対者に対して賛成意見を持って封じようとするのではなく、逆に反対者に対する説明を通して道民の理解を深めていくつもりで、真摯に、しっかりと説明していく姿勢が、まず必要だったのではないのでしょうか。

しかし、現実には、北電の社員があたかも一般道民であるかのように装い、

賛成意見を述べており、これでは、「さくら」仕立ての騙しといわれても致し方ありません。

そもそも「やらせ」は、事実関係を作為・捏造しておきながらそれを隠匿し、あたかもそれが事実であるかのように見せたり、称したりすることをいうと定義されています。

福島第一原発事故を経験した今、改めて、プルサーマル計画の必要性や、安全性について考えなければならないとしても、北電がシンポジウムで行った説明そのものが虚偽だったといった事ではないと信じています。そういう意味では、「やらせ」というより、社員を「さくら」として一般道民の役をやらせたという構図に近いと思っています。

とはいえ、台本が粗末で、折角の大事な舞台を台無しにした北電の責任は極めて重大です。

北電には、事実関係の解明も含め、道民の信頼回復のために最善を尽くしていただくしかありません。(塾頭 吉田 洋一)